

〈図画工作〉

主体的に見方・感じ方を深め、想像を膨らませる指導の工夫

——造形遊びにおける「ひと」「もの」「こと」と対話する活動を通して（第6学年）——

南城市立大里北小学校教諭 川 満 弘 美

I テーマ設定の理由

これからの社会は「グローバル化の進展」や「飛躍的な人工知能の進化」「情報化」により、複雑で予測困難な時代を迎えることになると言われている。このような先行き見えない時代を生き抜くため、人間ならではの感性を働かせ、社会や人生、生活をより豊かなものにし、新しい未来の姿を構想し創り出していく資質・能力を確実に子供たちに育むことが学校教育には求められている。

『小学校学習指導要領解説（平成29年度告示）解説図画工作編』（平成29年7月告示、以下『図画工作編』）では、「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」を身に付けさせることが教科の目標として示された。その資質・能力を人と社会生活とのつながりや在り方と結びつけて理解させるために、「造形的な見方・考え方」を働かせる授業改善や言語活動の充実が求められている。つまり「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを持ちながら意味や価値を作り出すこと」のできる造形活動に対話活動を取り入れながら授業を行うことが必要であると考え。

これまでの私自身の実践を振り返ると、学習活動で取り組ませる作品のイメージを広げるための手立てとして材料集めや過去の作品を展示し、制作途中で意図的に他の作品のよさに気付かせる時間をとっていたが、うまく表現できずに戸惑う児童や発想が浮かばず活動が止まってしまう児童が見られた。そして、児童の振り返りカードからは、「楽しかった」「頑張った」「面白かった」などの表層的な感想に留まっていた。その要因として、児童が作品を見るときの見方がわからず、作品のよさを深く感じるができなかったため、自身の表現活動に活かすことができなかった。また、これまで自身の教科指導の目的が明確ではなく、作品を完成させることが目的となっていた。このことから、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを言語活動を通して膨らませながら意味や価値をつくりだすことができる授業改善が必要であると考え。

そこで、高学年の「造形遊び」の単元の中に対話活動を取り入れた授業展開の工夫を行い、『図画工作科編』で示されている図画工作科の特質を踏まえた「見方・感じ方」を深め、想像を膨らませたい。「造形遊び」は、材料や場所・空間、友だちに進んで働きかけ、発想や構想が繰り返し行われることで、自分のイメージを広げ膨らませることが期待できる学習である。授業の実践において関わる材料や場所・空間を「もの」、表現活動を「こと」、友だちや先生を「ひと」とし、「もの」や「こと」「ひと」と関わることを対話として捉え、対話活動を充実させていきたい。対話からの気づきを通して「見方・感じ方」を広げ、対話を深めていくことで、新しい発想や構想を生み出すことができるであろうと考える。さらに、対話からの気づきを「形や色などの造形的な視点」で捉え直す指導や「造形的な視点」を意識させながら学習していくことが学びをより深めると考える。「ひと」「もの」「こと」の対話を充実させた活動を行うことで主体的に「見方・感じ方」に気づき、深め、自分なりの想像を膨らませながら作品を表現していくことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「造形遊び」での表現及び鑑賞活動を通して、「ひと」「もの」「こと」との対話活動を取り入れることによって、主体的に「見方や感じ方」を深め、想像を膨らませることができるであろう。

II 研究内容

1 主体的に見方・感じ方を深め、想像を膨らませるとは

(1) 主体的に見方・感じ方を深めるとは

『図画工作編』では、「生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて感じとったり考えたりした作品や材料との出会いの中で見方や感じ方を深める」と示されている。奥村高明（2018）は「子どもたちは、感じたことと、自身の知識や経験を結び付け、自分の考えを組み立てています。さらに、自分にはない考えと出会い、触発されるような対話を通して、自分の見方を広げていきます。このように、感じ、結び付け、考え、改めて対象に向きあうことを繰り返すことで、見方が深まり、世界をより豊かに味わうことができる。（中略）感じて、自他の考えを結び付けて、自分なりに思考する、その繰り返し」が『見方・感じ方を深める』と述べている（図1）。よって、本研究では、児童がこれまでの経験の中で捉えた「見方・感じ方」を基に、様々な対象や事象と対話的な学びを通して、違う「見方・感じ方」があることに気づかせるとともに、その気づきを受け入れながら、これまでの自分の「見方・感じ方」と結び付け、再構成させることで違った「見方・感じ方」が作り出され、新たな「見方・感じ方」で事象や対象を捉え、それを生かしながら表現する活動を行っていく。これは、新たな価値に気づき、新たな価値をつくり出していく活動であり、この活動が繰り返し行われ、積み重なっていくことで、「見方・感じ方」は深まっていくと考える。

以上のことから、本研究において、「見方・感じ方」を深めている児童とは、児童が持っている「見方・感じ方」を基に、材料や場所・空間と、人、友達の活動している姿や作品などとの対話的な関わりから、よさや面白さ、美しさを「造形的な視点」（表1）から感じ取り考えたりする中で、新たな価値に気づき、新たな価値をつくりだしている姿と捉える。

(2) 想像（イメージ）を膨らませるとは

『図画工作編』においてイメージとは、「児童が心の中でつくりだす像や全体的な感じ、又は、心に思い浮かべる情景や姿のことである。どちらも、生まれてからこれまでの経験と深く関わっており、児童は、そのときの感情や気持ちとともに、心の中に浮かび上がらせている。」と示されている。また、「自分の感覚や行為を通して形や色などの造形的な特徴を捉えることが、自分のイメージをもつことにつながっていく。」「ものをいろいろな表現に使うことからイメージを広げている」などとも示されていることから、これまでの経験を基にイメージを頭の中で思い浮かべることはできても、ただ材料を手を取るだけ、作品を見るだけではイメージは広がらないし深まらないと考える。「つくってみたい」という思いを持たせ、能動的に材料に触れたり、場所と関わり合ったりする中からの気づきを「造形的な視点」と絡めながら捉えていくことで、「この材料をつかってこんなことができそうだ」とか「この場所はもっと暖かい雰囲気に変えていけそうだ」など、イメージが具体的に頭の中で思い浮かべることができる。さらに、自分のイメージを基に他者と話し合う活動を設定することでイメージが明確になり、広がり膨らんでいくと考える。「造形的な視点」から捉えることは、「見方・感じ方」が広がることでもあり、「見方・感じ方」が広がることで、イメージを膨らませることができると考える。

よって、本研究において、イメージを膨らませている児童の姿とは、思いを持ち、「見方・感じ方」が広がり深まることを通して、これまでとは違う新しい自分のイメージをつくり出したり、

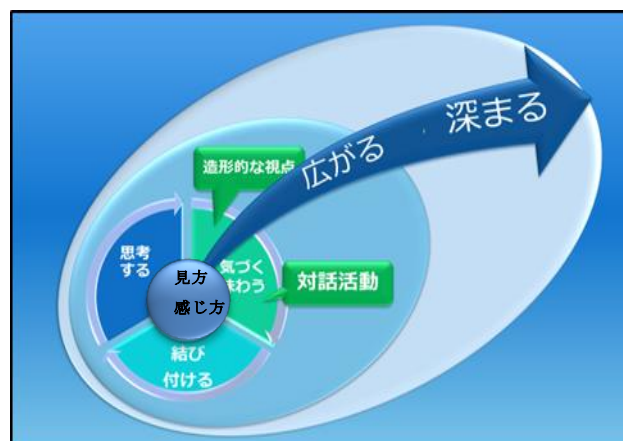


図1 見方・感じ方が深まる活動

表1 具体的な造形的な視点

・いろいろな形や色	・色の感じ	・触った感じ
・形の感じ	・色の明るさ	
・形や色の組み合わせによる感じ		
・動き	・奥行	・色の鮮やかさ

操作している姿と捉える。

(3) 主体的な見方・感じ方を深め、想像を膨らませる指導の工夫について

「造形的な視点」について『図画工作編』によると図画工作科の知識にあたり、「表現及び鑑賞の活動の基になるものであり、コミュニケーションの基盤になるものである。」また、「一人一人が感性や想像力を働かせて様々なことを感じ取ったり考えたりし、自分なりに理解したり、何かを作り出したりするときなどに必要となるものである。」と示されている。このことから、「見方・感じ方」を深め、イメージを膨らませることができる児童を育成するためには、「造形的な視点」の学びとそれを活用しながら学習することや、これまでの自分との違いや他者との違いに気づけるような対話的な活動をしていくことが重要であると考ええる。

そこで、本研究では、「造形的な視点」に気づき、活用させていくために「造形遊び」活動に入る前に独立した鑑賞の授業を行う。また、毎時の授業では「造形的な視点」を確認してから授業をスタートする。さらに、「造形的な視点」からの発問の工夫を行うとともに、児童の「造形的な視点」からの気づきを全体で共有する。そうした手立ての積み重ねが主体的な学びへとつながっていくと考える。さらに、材料や場所・空間と触れ合ったり、友だちとアドバイスし合ったりするなどの対話的な活動も取り入れていく。

2 造形遊びにおける「ひと・もの・こと」と対話する活動について

(1) 造形遊びについて

「造形遊び」の内容として『図画工作編』では、「児童が材料などに進んで働きかけ、自分の感覚や行為を通して捉えた形や色などからイメージをもち、思いのままに発想や構想を繰り返し、技能を働かせてつくることである。」と示されている。また、山口喜義(2016)は、「始めから作品をつくる事を目的とせず、(中略)表現される過程によって得られる学びをより一層重視している表現活動である。」と述べている。つまり、「造形遊び」とは、材料や場所などに関わることで造形的な特徴からの気づきがきっかけとなり、イメージを生み出し、自分の表したいことを表現しようとする方法を見つけ活動していくことが能動的に行われる学習である。表したいことを追求する中で、材料を変えてみたり、作り方を変えてみたりする活動が何度も繰り返し行われる。この活動こそ、新たな意味や価値をつくりだしている児童の姿である。以上のことから「造形遊び」は、「見方・感じ方」を深め、想像(イメージ)を膨らませることができるのに適した学習活動であると考ええる。

(2) 「造形遊び」と対話を中心に据えた鑑賞活動との関連について

『図画工作編』では、「表現と鑑賞は本来一体であり、相互に関連して働き合うことで児童の資質・能力を育成することができる。」と示されている。つまり、児童はつくりながら、材料を見つめ手にしたり、友だちのつくっている姿や作品を見たり、友だちと話し合ったりしながら新しい発想を生み出している。児童は表現活動を行いながら同時に鑑賞活動を何度も何度も繰り返し行っている。鑑賞することで、よさや美しさを味わいながら発想や構想の手掛かりを見つけ、表現に生かしている。表現しながら感じ取ったり考えたりする鑑賞こそ事象や対象と対話していることと捉える。そこで本研究では、「造形遊び」の特徴を生かしながら、「見方・感じ方」を深めるために、表現と対話が往還するような指導の工夫を指導計画の中に取り入れていく。

対話的な学びについて大泉義一(2017)は、「子供は、表現しながら常に鑑賞の能力を働かせ、内言的な言語活動を行いながら、次の表現の活動をつくりだしている。(中略)子供自身による自己との対話が充実してはじめて、他者との対話が生まれる」と述べている。また、相場亮(2018)は「対話的な学びの実現のために、図画工作科は、友だちや教師、(中略)だけではなく、自己とも対話しながら学ぶ学習活動であることを理解する必要がある。子どもは常に『ここはどのような工夫が必要か』『どのような材料を使おうか』など、言葉には出さなくとも深い思考を繰り返し行っている。そのことを踏まえた上で、(中略)対話の対象や方法をどのように設定し、学習活動を展開させるかを考えることが必要である。」と述べている。

以上のことから、対話の対象を教師や友だちなどの「ひと」、材料や場所・空間、友達の作品などの「もの」、つくる活動の「こと」とし、どのように学習に取り入れ展開させるかを下記に示すこととする（表2）。また、毎時間の活動後、対話からの学びについて振り返りを行い、気づきや考え、思いを言葉で整理する活動を取り入れる。そうすることで、児童が自らの成長や学びに気づけると同時に、教師は児童の実態が把握でき、指導改善につながると考える。

表2 「ひと」「もの」「こと」との対話の対象と活動内容

対話の対象	活 動 内 容	
「もの」 ・材料 ・場所や空間 ・友だちの作品 自己の中で 「もの」と対話	材料	・身近な材料（ペットボトル、段ボール、卵パック、割りばし、紙コップなどの容器等）とし、自分たちで用意させる。用意する時間から材料との対話が始まっていると考える。
	活動場所	・高学年の児童が意欲的に活動できるよう、教室を飛び出し、階段や廊下校庭や光があふれる場所や空間を活動場所とする。見慣れた場所が、変身していく面白さを味わうことで、新たなイメージが生まれ、表現活動が更新されていくと考える。
	途中鑑賞	・友だちの作品を見ることで、よさや面白さ、美しさに気付き、それを受け入れることで、見方や感じ方、イメージが広がり、表現する活動に変化を与えることができるかと考える。
「こと」 ・つくっている活動のこと 自己の中で 「こと」と対話	ラフスケッチ	・児童が頭の中で浮かんだイメージをラフスケッチを通して絵や言葉で具現化していく。具現化することで、曖昧だったイメージがより具体的になり、表現活動につながっていくと考える。
	既習事項の確認	・1年生から5年生までに活動してきたであろう「造形遊び」の具体的な内容や「造形遊び」に生かせるであろう活動内容を写真で掲示する。また、学んできた技法を提示する。既習事項を振り返ることができれば、これまでの学びを生かしつつ、更新しながら活動できると考える。
	活動時間の確保	・「つくり・つくりかえ・つくる」活動の時間を十分にとることで、見方や感じ方の違いに気付きいたり、それを受け入れながら新たな見方や感じ生み出され、イメージが広がっていく活動が何度も行われ、見方や感じ方が深まり、イメージを膨らませることができると考える。
「ひと」 ・友だち ・教師 他者との対話	グループ活動	・活動形態をグループにすることで、制作の合間に他の児童の活動の様子や作品を見ることができ、自然な流れで対話が行われ表現と対話が活発に行われる。そのため、様々な気づきや思い、イメージがあることに気付き、見方や感じ方を深め合うことができると考える。
	話し合い活動	・グループで伝えたい思いや表現に共感したり、考え合ったりする活動を取り入れることで、見方や感じ方がさらに深まっていくと考える。

Ⅲ 指導の実際

1 題材 「Change the school」

2 目標

- 自分の感覚や行為を通して、形や色などの特徴を理解し、場所にあるものの形や色などの特徴を生かし、いろいろな材料を活用しながら、活動を工夫することができる。〔知識及び技能〕
- 場所や空間などの特徴を基に造形的な活動を思い付き、どのように活動するか考えるとともに、表現の意図や特徴、つくり方の変化などについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕
- つくりだす喜びを味わい、主体的に場所にある形や色などを生かして、楽しく見えるものをつくる学習活動に取り組むことができる。〔学びに向かう力、人間性等〕

3 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・自分の感覚や行為を通して、形や色などの特徴を理解することができる。 ・これまでの経験や技能を生かし、方法などを組み合わせるなどして、活動を工夫してつくっている。	・材料や場所・空間などの特徴を基に造形的な活動を思い付き、どのように活動するかについて考えている。 ・自分たちのつくりだしたものの造形的なよさや美しさ、つくり方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めている。	・つくりだす喜びを味わい、主体的に場所にあるものの形や色などを生かした造形遊びをしたり、鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。

4 指導計画（全8時間）と評価計画（学習評価：記録に残す評価◎ 指導に生かす評価○）

	目標	学習活動	対話	教師の支援	主な評価基準 〔観点〕〔評価方法〕
1	いろいろな見方や感じ方があることを知ろう。	「アートでトーク」 ①アートを見て気付いたことや感じたことを付箋紙に書いていく。 ②付箋紙を分類・整理する。 ③全体で分類・整理したことを発表する。 ④学習を振り返る。	ひと・もの	・友達と対話しながら楽しんでアートが見られるようにする。 ・全体で分類・整理した形や色などの造形的な視点を黒板に可視化する。 ・分類整理されたことが今後の活動に生かせるように常時掲示する。	〔知識・技能〕 〔発言・行動観察・付箋紙・振り返りシート〕 ○
2	どんな学校にしたいか考えよう。	「どんな学校にしたいか考えよう」 ①学校について考える。 ②どんな学校にしたいか考える。 ③グループで話し合い、どんな学校にしたいか主題を1つに決める。 ④学習を振り返る。	ひと	・大里北小学校について話し合う。 ・もっとよくしていきたいという思いを持たせる。 ・みんなの意見を取り入れてまとめさせる。	〔主体的に学習に取り組む態度〕 〔発言・行動観察・振り返りシート〕 ◎
3	変えてみたい場所を探しながらその場所の特徴を見つけよう。	「楽しい空間に変えたい場所を探しに行こう」 ①作品例を見て、よさや面白さなど気づいたことを発表する。 ②変えたい場所をグループで探していく。 ③変えたい場所を1つ決め、変えたい場所の特徴と、なぜそこを変えたいのかをグループで話し合う。 ④変えたい場所を全体に発表。 ⑤今日の学習を振り返る。	ひと・もの・こと	・造形的な視点をもって場所探しができるようにする。 ・変えたい場所をアイパッドで写真にとる。 ・写真をみながら、変えたい場所をグループで相談して決める。 ・その場所の特徴を見つける。 ・形や色などの造形的な視点を意識させながら振り返らせる。	〔知識・技能〕 探した場所の形や色、奥行きなどの特徴を理解することができる。 〔発言・行動観察・ワークシート・振り返りシート〕 ◎
4	場所や空間の特徴から、どのように変えたいか楽しい空間になるか考えよう。	「どんなふうに変えたいか楽しい空間になるか考えよう。」 ①どう変身させるか、個人で考える。必要な材料も考える。（ラフスケッチ） ②個々のアイデアをもちよって、グループで1つにまとめる。 ③1つにまとめたことを全体で共有する。 ④学習を振り返る。 ※材料集めをスタートさせる。	ひと・もの・こと	・場所や空間の特徴から、どう変身できそうか考えさせる。 ・造形的な視点での気づきや、自分のイメージの変化に気付けるような振り返りにする。 ※材料コーナーを設置し、いつでも材料と関われるようにしておく。	〔思考・判断・表現〕 材料や場所・空間などの特徴から、どのように変身すると楽しい空間になるか考えることができる。 〔発言・行動観察・ワークシート・振り返りシート〕 ○
5	材料を工夫して活用し、場所や空間を変身させよう。	「材料を工夫して活用し、いろいろ試しながら場所を変身させよう」 ①材料と触れ合う。 ②材料の特徴を生かし、どのように変身できそうか考えながら活動する。 ③学習を振り返る。	ひと・もの・こと	・材料と関わる時間を持ち、材料の特徴やよさを感じ取れるようにする。 ・材料の特徴や活動しているの気づきを振り返らせる。 ・次の時間はどのようにしていくかあるていどグループで計画させる。	〔思考・判断・表現〕 〔発言・行動観察・振り返りシート〕 ○
6 7 検証1	材料を工夫して活用し、場所や空間を変身させよう。	「材料を工夫して活用し、いろいろ試しながら場所を変身させよう」 ①場所や空間の特徴を生かし、材料をどう工夫していこうか試行錯誤しながら活動する。 ②途中鑑賞の時間を設定する。 ③試行錯誤しながら活動する。 ④学習を振り返る。 ⑤片付けをする。	ひと・もの・こと	・面白い発想をしているグループの作品は他のグループに紹介する。 ・途中鑑賞の時間、他の作品のよさに気づかせ、そのよさを自分たちの作品に生かせるようにする。 ・どのように場所が変わったのかを造形的な視点から気づかせる。また、材料の特徴、他のグループの活動や作品を見ての気づきを振り返らせる。	〔思考・判断・表現〕 場所や空間などの特徴を基に、どのように表現すれば楽しい空間になるか考えることができる。 ◎ 〔主体的に学習に取り組む態度〕 〔発言・行動観察・振り返りシート〕
8 検証2	お友だちの作品のよさや面白さを味わおう。	「楽しくつくりかえた空間のよさや美しさを味わおう」 ①変身した場所を鑑賞し合う。 ②よさや美しさ、面白さなどについて感じたことを交流し合う。 ③学習の振り返りを行う。	ひと・もの	・他のグループの作品を造形的な視点から鑑賞させる。 ・これまでの振り返りシートを用いて、学習全体の振り返りを行う。（学習をスタートさせる前と後では何が変わったか、どんなことができるようになったのか、どんな気づきがあったのかなどを視点に書かせる）	〔思考・判断・表現〕 〔発言・ワークシート・振り返りシート〕 ◎

5 検証授業1（7/8時間）

(1) 本時の目標

場所・空間の特徴を基に、どのように表現すれば楽しい空間になるか考えることができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕

(2) 授業仮説

材料や場所・空間と関わり、グループで話し合をしながらか活動を進めることで、いろいろな気づきやイメージがあることに互いで学び、それを生かしながら制作することができるであろう。

(3) 授業展開 (学習評価：記録に残す評価◎ 指導に生かす評価○)

	学習活動	・指導上の留意点	◆評価 【観点】(方法)
導入 10分	1 学習のめあてを確認する。 材料を生かして、テーマに合わせた「場所」や「空間」を变身させよう。	・他のグループのよさや面白さを記入したワークシートを参考にグループで話し合いをさせる。 	◆場所や空間などの特徴を基に、どのように表現すれば楽しい空間になるか考えることができる。 【思考・判断・表現】(行動観察・振り返りシート) ◎
展開 35分	4 テーマにあった場所や空間に变身させよう。 ①場所や空間が变身していく活動(つくり、つくりかえ、つくる)を楽しむ。  ③素早く片付けさせる。	・計画を変更しても構わないことを確認する。 ・高い壁などの飾りは、グループで気を付けながら行わせる。 ・活動中は、グループで見合いながら制作するよう声かけする。 ・他者の見方や感じ方、自分たちのテーマやメッセージを意識させる。 ・片付けは素早く行わせる。	【主体的に学習に取り組む態度】 (行動観察・振り返りシート) ○
まとめ 5分	5 振り返り ①今日の学習を振り返る。 ②振り返りを発表する。 ②次時の学習内容を確認する。	・頑張ったところや工夫したところ、活動の中での気づきや新たな学びなどをふり返る。 ・造形的な視点を意識させながら振り返らせる。	

IV 仮説の検証

本研究では、「造形遊び」での表現及び鑑賞活動を通して、「ひと」「もの」「こと」との対話活動を取り入れることによって、主体的に「見方・感じ方」を深め、想像を膨らませることができるであろうと考え、研究を進めてきた。検証方法として、行動観察やワークシート、振り返りカード、ラフスケッチ、作品、アンケートから児童の変容について考察する。

1 造形遊びにおける「ひと」「もの」「こと」と対話する活動について

(1) 「もの(場所や空間・材料、作品)」と対話する活動について

第3時は「場所や空間」と対話する活動である。教室を飛び出し变身させてみたい場所を自分たちで探しにいき、その場所や空間の特徴を見つける活動を行った。その場所や空間に身を置き、五感を通して「造形的な視点」から特徴を見つけさせたことで、「白い色が多くてさびしい気がする。」「この場所は、奥行きがある。」などのように形や色などの視点から特徴を見つけていた。さらに、場所によって光の入り方や風の通り方の違いに気づいたり、図2のように、天気の変化で場所や空間の特徴が変化することを見通していた児童もいた。図3より毎日何気なく見ていた学校のいろいろな場所や空間を、これまでとは違った場所や空間として「造形的な視点」から捉えることができたことが、空や海、夜の風景に变身できそうだとイメージをもつことに繋がったと捉える。特徴を見つけきれ

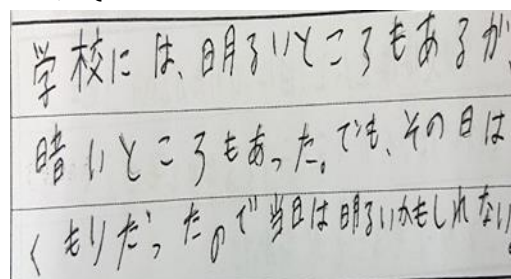


図2 場所や空間の特徴を見つけた児童

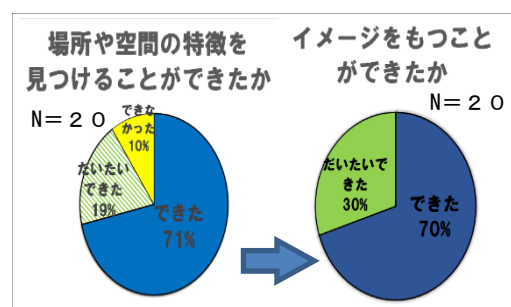


図3 特徴を見つけ、イメージが持てた児童数

ずにいた児童2名には「造形的な視点」を意識した声掛けを行ったが、戸惑っていた。そこで、友だちの見つけた特徴を見せてもらい、自分が感じている特徴に近いものはどれか選択させた。すると、自分の視点としてワークシートに記述することができ、イメージをもつことができていた。他者の「見方・感じ方」を受け入れることで、自分の「見方・感じ方」に気付かせることができたと捉える。

第5時は、材料と対話する活動を中心に行った。材料は自分たちで用意させた。用意する期間、各グループ箱を準備し、集めた材料をその箱に保管させた。さらに、ワークスペースにその箱を設置し、休み時間でも材料を手に取り材料と対話できるようにした。材料を用意する時間からすでに材料との対話が始まっていた。制作中は、材料を手に取りじっと見つめる姿やいろいろな角度から材料を見たり、感触を味わう姿(図4)、材料をくしゃくしゃにしてみたり、折ったり曲げたり、とにかくくちぎってみたり、音を確認めたりしながら材料のよさや特徴を味わっている児童が見られた。多くの児童が材料と対話することを楽しんだ後、制作活動に移っていた。「どんな感じがする?」と声掛けすると「あったかい」「ふわふわする」「ごつごつしている」と答え、児童がどこを見て何を感じているのか理解できた。さらに、「この材料の感じ何かに使えそうだね」という声掛けがきっかけで、「あ、巣だ。」と鳥の巣をひらめく児童もいた。材料と「造形的な視点」から対話することで、図5のようにアイディアが広がっていくことができたと捉える。

第6・7時の合間は、「友だちの作品」と対話する活動である。他のグループの作品と対話し、「造形的な視点」からよさや面白さ、美しさを感じ取り、自分たちの作品づくりに生かせるものはないか検討する途中鑑賞の時間を設定した。「紙のぐしゃぐしゃ感が砂浜のイメージをだしているね。」「同じ虹でも、グループによって色や形が違うんだね。」など、「造形的な視点」からの気づきやよさ、面白さを見つけている児童の声が聞こえた。途中鑑賞後の作品から、こいのぼりや星が付け足されたり、UF0の形が変わっていたり、作品の置く場所が変更されていた。図6や作品の変化から、作品のよさや面白さを見つけることができ、それを取り入れて自分の中で再構成しながら作品づくりに生かしていたことが分かった。しかし、「早くつくりたい。ある程度つくってから、他のグループの工夫を取り入れるかは考えたい。」というグループもあり、途中鑑賞が制作活動の妨げになっていたグループもあった。今後は、児童の実態を見ながら各グループが自分たちのタイミングで鑑賞できる設定も計画に取り入れておく必要があると感じた。

「もの(材料や場所・空間、友だちの作品)」と対話する活動の充実が図れたことで、「造形的な視点」から「もの」の特徴に気づくことができたため、「もの」に対する「見方・感じ方」が広がり、イメージが膨らむことで、つくる「こと」に繋がっていったと捉える。

(2) 「こと(つくる活動)」と対話する活動について

第5・6・7時は、つくる「こと」と対話が行われる活動である。活動前に「造形的な視点」



図4 材料の感触を試す児童の姿

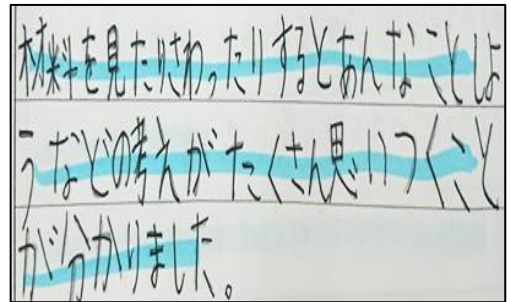


図5 児童の振り返りシートより

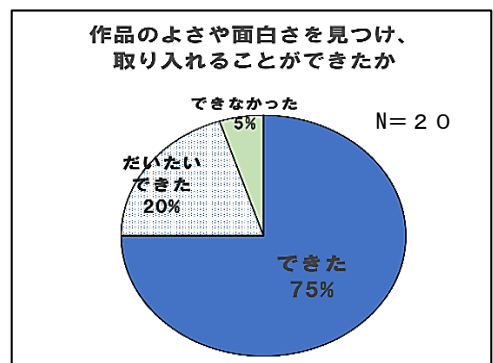


図6 よさや面白さを取り入れた児童数

を確認した。また、技能（切る、折る、並べる、積む、つなぐ、ぶら下げる、包む、丸めるなど）について振り返ったり、これまで活動してきたであろう「造形遊び」の様子を教室の壁に張り出ししておき、そこからヒントを得たり、友だちの活動する姿や作品を見ることが参考になることを確認した。さらに、「造形的な視点」からの気づきを生かした活動を紹介しながら制作活動を行わせた。どの児童もつくる「こと」と対話しながら活動していた。虹をつくろうと思って作っていた児童は、材料の質感からアーチ状にすることが難しく、どうしたらアーチ状になるか試行錯誤する姿が見られた。結果、虹ではなく、雲から光がとびだす作品へと進化していた。この児童の振り返りから、つくりながらイメージが変化していく様子を読み取れた。さらに、階段に接した壁につくった「太陽」を階段から見下ろすように見ると、見え方が変わることにも気づき、見る人の視線をイメージして、「太陽」を低い位置から高い位置へと貼り直していた。

図7のように、これまでに学んだことや知っている知識を生かして活動していたことも分かった。既習事項を生かしながら活動できたことで、イメージしたことが表現することに繋がったと捉える。

イメージの変化をラフスケッチと仕上がった作品を比べ、形や色、配置などの変化から読み取ると、5グループの内3グループが大きく変化していた。つくる「こと」を通して、新しいイメージが生み出されて変化していったと考える。変化があまり見られないグループもあったが、ラフスケッチを仕上げる段階でイメージがすでに膨れ上がっており、それを実際に表現できることに満足していたと捉える。

表3より、つくる「こと」と対話できたことで、違った「見方・感じ方」に気づき、「見方・感じ方」が広がり深まったことで、新しいイメージがつくり出されていた。また、その活動が何度も行われたことで、イメージが大きく変化していったと捉える。

(3) 「ひと」と対話する活動について

第4時は、一人一人ラフスケッチを持ち寄りグループで話し合う活動である。話し合うことで、いろいろな発想があることと、みんなの発想を組み合わせ、場面を再構成させたことで、ラフスケッチに変化がみられた(図9)。場所や空間の特徴をもとに、浮かんだイメージを簡単な絵や言葉で具現化することと、具現化したことをグループで話し合わせることは、イメージを広げ膨らませるのに有効であったと捉える。

第5・6・7時は、グループで作品をつくっていく活動である。「この作品どこに設置したらいいと思う?」「もっと魚をつくったら海みたいになるんじゃない!」「それ、いいね。これも付け足せばよくならな

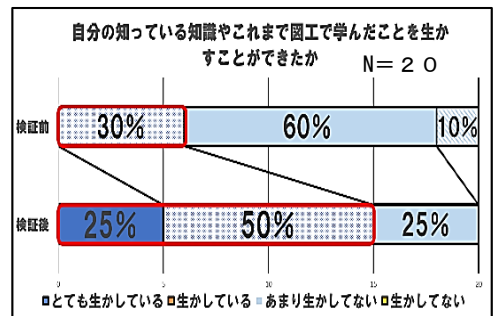


図7 既習事項を生かすことができた

表3 児童の振り返りシートより

- ・1つのものでも、切ったり、折り曲げたりすると、いろいろなこと使えることが分かった。
- ・斜めに切ると、立体感が出せることに気付いた。
- ・ものを工夫してつくったりすると、より鮮やかで、明るくなることが分かった。
- ・卵パックを地球にしたいと、パックに青色を塗ったけど、薄かったから、中に綿を入れたら濃い青色になった。
- ・綿をお皿の上にのせたり、画用紙の上に貼ったりしてたくさん工夫したら、いい方法が浮かんできた。
- ・貼り方を変えるだけで、大きく見えたり、小さく見えたりした。
- ・ガラスでも光が届きやすい所と、届きにくいところがあって、光を通したいものや光を当てたくないものを工夫して配置した。

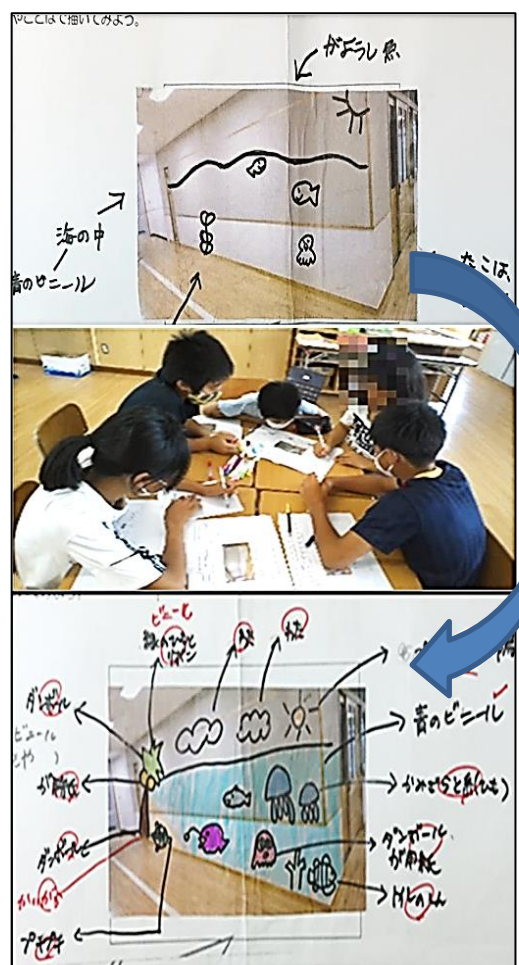


図8 ラフスケッチの変容

い？」など活動に困ったときやいいアイデアが浮かんだとき、共感するときなどに対話が活発に行われていた。活動が止まっている児童に「どこに作品を配置しようと考えているの？」と声掛けすると「上は光がくるけど、下は校舎にかくれて光がこないから、上がいいと友だちが教えてくれたから・・・」と答えた。友だちとの対話の中で、光の入りに気付かされ、それを生かして作品の置く位置をどうしようか考えていたことが分かった。また、表4から、友だちと対話することで、違った「見方・感じ方」に気づいたり、それを受け入れることで、新しいイメージが作り出されていたことが分かった。

最後の鑑賞会では、他のグループの作品を一人一人鑑賞した後、気付きや感じたことをグループで話し合わせた。表5のような感想から、自分の「見方・感じ方」を広げることができたと捉える。しかし、「見方・感じ方」を深める鑑賞はできなかった。「なぜそう思ったのか?」「どこからそう思ったのか?」など根拠を引き出すような発問や児童の考えや思いを他者に繋げるような発問の工夫ができず、「見方・感じ方」を深めることができなかった。思考を深める「発問」に課題が残る授業となった。

学習形態をグループにしたことや話し合い活動を意図的に仕組んだことで、「ひと(友達や教師)」との対話が充実していたと捉える。対話が充実したことで様々な考えや思い、イメージがあることに互いで気づき、「見方・感じ方」を深め合う活動ができ、イメージを膨らませることに繋がったと捉える。

2 摘出児童Hの変容

図画工作が「嫌い」で「作品を作るときにアイデアが浮かばない」ことを悩んでいた児童が「造形遊び」において「ひと」「もの」「こと」との対話を取り入れることで「見方・感じ方」が深まり、イメージを膨らませることができたかを活動の様子や作品、振り返シートから分析をする。

一人で考えたラフスケッチでは、飾り1つに生き物2匹だけだった。グループで話し合い、グループみんなのアイデアが組み合わさって、魅力あるラフスケッチに更新していた(図9)。制作過程では、他者のよさに気づくことで、イメージが浮かび制作活動に繋がっていた様子(図10)や雷の位置をどこに置くといい作品になるのか友だちと対話する姿が見られた(図11)。図12より友だちの考えと自分の考えを組み合わせ、新たな考えが作り出されていたことが読み取れた。「ひと」「もの」「こと」の対話活動を取り入れたことで、い

表4 グループ活動からの気づきや思い

- ・どうやってつくるものを表そうかなど話し合って、いろいろ違う意見が出てきて楽しかった。
- ・グループの人と一緒に考えながらつくっていくと、思いつかないものが出てきた。
- ・「こうすれば、もっと自然感がでるよ」「これをここにはついたら、今よりきれいになるね」とか話し合うことが楽しかった。
- ・グループみんなで、アイデアを出しあったり、「こうしたいいいんじゃない」と案をだすところが楽しかった。
- ・グループの人と一緒にやって、思ったのと違うものをつつたり、いろいろな色を使っていたのがすごいと思った。
- ・思いつかないことを友だちは思いついているところがすごいと思った。

表5 鑑賞会後の児童の振り返りより

- ・グループで同じものを見ても、友だちは自分に気付かなかったことをきづいていた。
- ・人によって何に見えるかが違っていた。
- ・一人一人見ている視点が違うんだ。
- ・みんな違うことをみつけていたから、いろんな細かいところまで気付くことができた。
- ・いろいろな目線から、それぞれのグループのよさをたくさんみつけていたのがすごかった。
- ・面白い所をみるための見方に気付いた。
- ・一人一人思っていることは違うんだ。

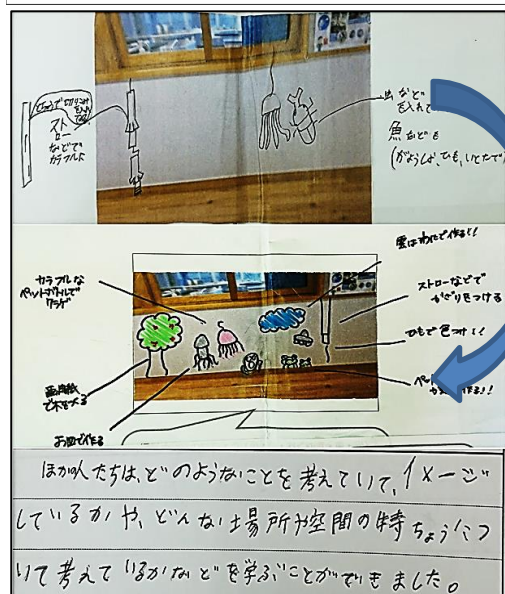


図9 ラフスケッチの変容と振り返り

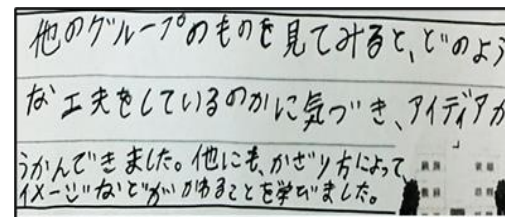


図10 児童の振り返りより



図11 友だちと対話する様子

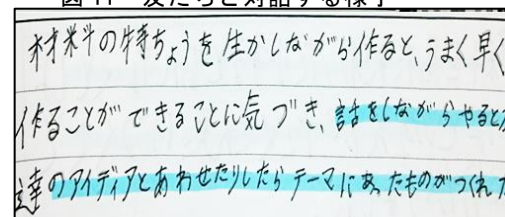


図12 児童の振り返りより

ろいろな「見方・感じ方」を知り、自己の中で再構成されたものが、魅力ある発想を生み、納得のいく表現活動につながることができ、自分なりの意味や価値づくりだしていたと捉える。

3 主体的に見方や感じ方を深め、想像を膨らませることができたか

事前・事後のアンケート結果より、「自分なりに作品を見たり、感じたりすることができますか」の質問に対して検証後は「できる、大体できる」が32ポイント増加となった(図13)。「作品をつくるとき、イメージが浮かびますか」の質問に対して検証後は「浮かぶ」が20%となり、「浮かばない」と答えた児童は一人もいなかった(図14)。「イメージが浮かんだときは、どんなときか」という質問に、「作品をつくっているとき、考えているとき」と「友だちと話し合っているとき」と記述している児童が多かった。今回の「造形遊び」の活動において、「こと」や「ひと」と対話しているとき、「見方・感じ方」が深まり、イメージが膨らんでいたと捉える。また、「造形遊び」を通して、表6のような学びに気づき、その学びを次の図工の時間や他教科、自分の生活に生かしていきたいと振り返っていた。

1・2・3の結果から、主体的に「見方・感じ方」を深め、想像を膨らませるために「造形遊び」を通して、「ひと」「もの」「こと」との対話を取り入れた指導が有効であったと考える。しかし、検証前と後で「イメージがあまり浮かばなかった」と答えた児童が4名おり、アンケートより友だちの作品のよさや面白さ、友だちとの対話の中で自分と他者との考えの違いに気付いていなかったことがわかった。つまり、「見方・感じ方」が広がっていなかったと捉える。「ひと」「もの」「こと」との対話の活動をこれからも取り入れつつも、今後は振り返りの時間をしっかり確保し、振り返ったことを交流していきたい。そこで、自分と他者の「見方・感じ方」の違いに気付かせるための支援を行っていきたい。

表6 どんな力が身についたと思うか

- ・自分の見る力がどんどん身についています。
- ・想像力が自分には身についたと思います。
- ・いろいろな見方が分かった。
- ・友だちの思いをきくことで、ほくはもっと考えられるようになった。
- ・見方や考え方が身についた。
- ・友だちの考えを聞いて、それを理解し、どうそれに付け足すかの力が身についたと思う。
- ・自分の想像していたものをこえるクオリティーのものがつくれる力が身につきました。
- ・友だちの意見を取り入れることで、もっといい考えが見つかること。
- ・友だちのアイデアを使ってみる力。

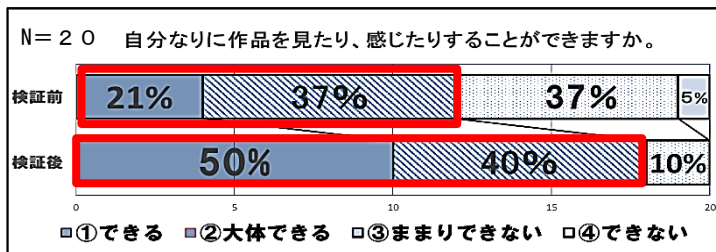


図13 見方や感じ方の広がりについての調査結果

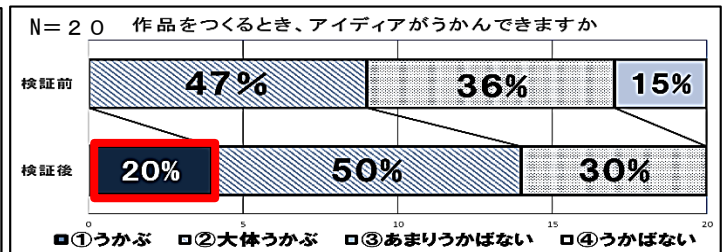


図14 想像を膨らませることができたかの調査結果

V 成果と課題

1 成果

- (1) 「造形的な視点」を意識させながら活動させたことで、「造形的な視点」から捉えたことが基となり充実した対話活動が行われた。
- (2) 活動場所を広げ、自ら活動したい場所や空間、材料の選択ができ、作品の展示の仕方も児童自身で決定できるなど能動的に活動できる工夫と、グループで活動させることで、「ひと」「もの」「こと」との対話活動の充実が図れた。
- (3) 「ひと」「もの」「こと」の対話を中心に据えた鑑賞活動が様々な場面で繰り返し行われたことで、児童の「見方・感じ方」が深まり、イメージを膨らませることへ繋がった。

2 課題

- (1) 「見方・感じ方」を深めきれなかった児童への支援の仕方。
- (2) 表現や鑑賞の指導の取り組みの中で、児童がそれぞれに十分に活動できる時間の確保や授業マネジメント等を意識した指導計画。
- (3) 鑑賞の場で思考を深める「発問」の工夫。

〈参考文献〉

- 文部科学省 2019 『小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説図画工作編』
- 新井貴則・福岡知子 2018 子どもの資質・能力を育む 図画工作科教育法 萌文書林
- 岡田京子 2018 世界一分かりやすい 会話形式で学ぶ、図画工作科の授業づくり 明治図書
- 南 育子 2018 『小学校図工の授業づくり はじめの一步』 明治図書出版
- 山口喜雄・佐藤昌彦・奥村孝明 2018 小学校図画工作科教育法 建帛社
- 阿部宏之 編著 2017『平成 29 年度 小学校新学習指導要領ポイント総整理 図画工作』 東洋館出版社
- 笠 雷太 2017 『「資質・能力」を育成する図工科授業のモデル』 学事出版
- 大橋 功 2016 『ゼロから学べる小学校図画工作授業づくり』 明治図書出版
- 岡田京子 2015 子どものスイッチ ON!! 学び合い高め合う「造形遊び」 東洋館出版社

〈参考 WEB サイト〉

- 相場亮 2018 「主体的・対話的で深い学び」を実現する図画工作科学習指導
<http://id.nii.ac.jp/1575/00000444/> （最終閲覧 2020 年 6 月）
- 阿部宏之 2020 「学習指導要領（図画工作）と造形遊び」
<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/11289> （最終閲覧 2020 年 6 月）
- 江村和彦 2019 「表現と鑑賞を往還する図画工作科の実践研究 ～『素材との対話』『友人との対話』を通した学びを通して～」
https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repo～ （最終閲覧 2020 年 6 月）
- 国立教育研究所 2020 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 小学校 図画工作
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_zugak.pdf （最終閲覧 2020 年 6 月）
- 図工のみかた 06 号
<https://www.nichibun-g.co.jp/data/education/zuko-mikata/zuko-mikata06> （最終閲覧 2020 年 5 月）
- 波多野達二 2015 「図画工作科における素材・対象との対話とイメージの形成との関係」
<https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/KK/0014/KK00140L027.pdf> （最終閲覧 2020 年 6 月）